

美術学部

近現代美術史・大学史研究センター
Geidai Archives Center of Modern Art

年報・紀要

令和2年度（2020）

『年報・紀要』発行の辞

大学史、それは藝大の背骨です。

明治20年(1887)の創設以来、本学は今年で134年目を迎えます。今日の藝大を成り立たせているのは、その積み重ねられた歴史そのものであり、それを言い換えれば、バックボーンだということになります。

バックボーン、つまりは人体においては背骨のことですが、人体におけるその役割は言うまでもなく極めて重要です。手足の骨や筋肉に比べれば、運動(活動)をしているときにはほとんど意識されることがありません。逆に、もし一度損傷すれば、起き上がることもできなくなってしまいます。

背筋を正して事にあたる、という言葉があります。姿勢を正し、それを保つための根本を担うのが背骨であるにもかかわらず、背骨は自由に鍛えることも矯正することもできません。はじめからあるのが当たり前で、何もしなくても人の活動を支えてくれている有り難い存在なのです。

大学史という藝大の背骨、すなわち創立の精神を健全に保つことが、GACMAの第一の使命です。骨粗鬆症的な症状を起こさないように骨を強くするための仕事に相当しますが、実際の業務は、コツコツと資料を整理し、それについて研究し、他機関や研究者とのネットワークを築くという目に見えない仕事の積み重ねに他なりません。

また、藝大の歴史という文化遺産は、単に藝大だけにかかわることではなく、そのまま日本の近代美術史に直結しているという自覚のもとで、私たちのもつ豊かな文化資源を学内学外を問わずに広く知ってもらい、さまざまな分野で活用していただくことを重要な役割と位置付けています。

そのような使命と役割を担うべく、GACMAは昨年から活動をはじめました。しかしながら令和二年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により計画していたことの多くを断念せざるをえませんでした。ここに、一年間の活動および研究成果の一部を報告いたしますが、次年度に向けてより一層、活動の充実をはかりたいと考えています。

美術学部近現代美術史・大学史研究センター長

古田 亮

目次

1、所蔵資料数	3
2、新収資料	5
3、資料活用実績	9
4、年間活動	11
5、資料紹介・研究報告	
東京美術学校と海外留学	
—GACMA 所蔵 海外留学関連資料より— 浅井ふたば	19
小場恒吉講義資料（青写真）について 芹生春菜	22
6、名簿	29

1、所蔵資料数

大学史史料

東京美術学校及び東京藝術大学美術学部の歴史について記録された学内資料。 約 2,000 点

寄贈資料

東京美術学校及び東京藝術大学美術学部に関係する個人や団体から寄贈された資料。

久保田鼎資料 148 点

上野直昭資料 約 3,000 点

大村西崖資料 2741 点

六角紫水資料 975 点

斎藤佳三資料 約 300 点

辻茂資料 11 点

三好二郎資料 書架延長 0.6m

中村勝馬資料 約 1,100 点

吉田千鶴子資料 書架延長 7.5m

藤巻嘯月資料 42 点

原安民資料 3 点

小島光真資料 13 点

西方俊資料 1 点

田中暎郎資料 1 点

川瀬勝蔵資料 1 点

高島七郎資料 1 点

小場恒吉資料 1 点

注：整理・登録済みのもの。今後整理状況に応じ変更の可能性がある。

図書資料	
	1378 点
図書	527 点
雑誌	464 点
図録	238 点
その他	149 点

注：整理・登録済みのもの。今後整理状況に応じ変更の可能性がある。

データ作成：浅井ふたば、工藤沙貴、高柳祿

2、令和2年度新収資料

- ①白濱徴 ブロンズ胸像写真（郵便はがき） 1 葉（購入）
- ②天岡均一筆 香取秀真宛書簡 1 通（水村正光氏寄贈）
- ③大浦食堂食器 1 式（北澤悦雄氏寄贈）

①白濱徴 ブロンズ胸像写真（郵便はがき） 1 葉

写真入り郵便はがき（葉書サイズ：14.0×9.2cm）

本資料は絵画（日本画）科の卒業生（明治27年[1894]卒）で、図画師範科教授の白濱徴（1865-1928）のブロンズ胸像写真である。正確には印画紙に焼き付けた写真ではなく写真入りで印刷された郵便はがきで、表面に胸像写真と「白濱徴先生寿像／大正十五年四月三日／贈白濱教授還暦祝賀会」の文字、裏面にその完成報告の旨が記される。

その記載によれば、大正15年の白濱教授還暦祝賀会の折に拠金を募った寿像が完成したので報告すると述べられ、宛名等の書き込みや切手を貼った痕跡はなく未使用だが、この時の拠金者へ差し出すために制作されたはがきではないかと推測される。印刷された日付は昭和2年12月3日。東京市麻布区板倉片町の「白濱教授還暦祝賀会」が差出人名義で、続けて像の情報として、完成日（同年11月28日）、原型を美校教授の水谷鉄也、鋳造を同津田信夫が担当したこと、拠金者605人、拠金高は2831円50（銭か）に上ったことなどが記される。

胸像のモデルとなった白濱徴は現長崎県五島市の福江藩の家老の家に生まれ、高等師範学校助教授を経て明治34年（1901）より東京美術学校で教鞭を取った。米国および英仏独へ留学して欧米の図画教育法を学び、帰国後に近代的な初等・中等教育の国定図画教科書等を出版。明治40年に美校に図画師範科が設置

されると主任教授となり、美術教育法の伝授と人材育成に尽力し、日本の近代美術教育の確立に中心的な役割を果たした。



この胸像設立の経緯は『東京美術学校校友会月報』第30巻第1号に詳しい。それによれば白濱の還暦に際し様々な祝賀行事のひとつとして銅像建設の議が持ち上がり、原型を水谷が製作、津田が鋳造して昭和2年に像が完成。胸像は学内に保管され、その間昭和3年に白濱が死去。同6年になり、図画師範科の親睦団体である錦巷会の尽力で校庭に建立することになり、新たに水谷設計の台石（岡山産の萬世御影石を磨いたもので高さ七尺五分）がつくられ、正木の揮毫による「故白濱微先生」の銅製題字パネル（ただし実際は「故」の一文字はなし）を嵌入、裏面には岡田起作揮毫の「昭和六年四月八日建設」の文字を入れて、工芸部校舎の師範科工芸部校舎玄関前に設置されたという。校内設置は当初白濱の七回忌に計画されたが、財界の好転の兆しにより1年前倒しして挙行された。

このブロンズ像および石台は現存し、現在は建物改築の計画により美術学部構内の図書館前に移動設置されている。改めて見比べると、本資料に写っている黒っぽい台の色は現状とはかなり異なるように見え、台前面に見える横長のプレートも今はない。したがって本資料は現状の石台に設置される以前、像の完成間も無くの状況を伝える貴重な資料であることが確認される。（芹生）

<参考文献>

長崎県美術館 web ページ作家検索「白濱微」<[https://www.nagasaki-](https://www.nagasaki-museum.jp/museumInet/coa/autGetByArt.do?command=view&code=50421)

[museum.jp/museumInet/coa/autGetByArt.do?command=view&code=50421](https://www.nagasaki-museum.jp/museumInet/coa/autGetByArt.do?command=view&code=50421)>

『東京美術学校校友会月報』第30巻第1号、1931,4

金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』中央公論美術出版、2008.3

『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第1巻～第3巻、ぎょうせい、1988-1997

正木直彦『十三松堂日記』第1、2巻、中央公論美術出版、1965

吉田千鶴子「屋外胸像、記念碑等」（東京芸術大学 web ページ「学生便覧/屋外銅像・記念碑、名木等〔上野キャンパス〕」＊胸像写真は『東京芸術大学学生便覧』2015年版に記載のもの）

<https://www.geidai.ac.jp/wp-content/uploads/2016/02/TUA_Binran2015_TheStatue_Monument.pdf>

②天岡均一筆 香取秀真宛書簡 1通

書簡、封筒（紙に墨書 書簡 18.0cm×76.2cm、封筒 19.7cm×7.8cm[現状]）

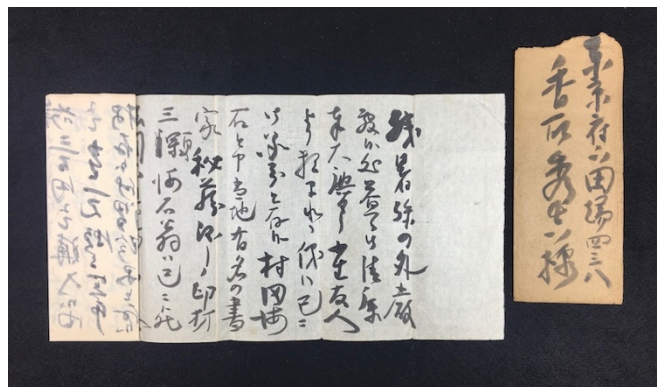
彫刻家天岡均一（1875-1924）が金工家香取秀真（1874-1954）に当てた墨書の書簡。封筒と前所有者により整理保管されていたことを示す整理カードが付随している。

天岡均一は兵庫県に生まれ、明治30年（1897）東京美術学校彫刻科卒。同36年、第5回内国勸業博覧会に「漆灰製豊公乗馬像」を出品し3等賞。大阪難波橋のライオン石像の作者として知られる。書簡は日付に年月が明記されず書かれた時期は不詳であるが、内

容は天岡が著名な書家村田海石が中国で購入し秘蔵していた印材3顆の売却を、香取に依頼するものである。

天岡と1歳年長の香取秀真とは、ともに本郷区根津片町にあった美術講習所(私立の美術学校で、校舎の2、3室が東京美術学校生徒の寄宿舎に割り当てられていた)の寄宿生に名が見え、あるいは学生時代から近い間柄であったのかもしれない。

村田海石(1836-1912)は幕末から明治にかけて活動した大阪の書家で、維新後は中国に渡り、帰国後十二軒屋町(現在の大阪府中央区)で後進の指導にあたった。小学校、中学校の習字教科書や、「三体千字文」「隸書千字文」等の習字手本の字を書いた人物として知られる。門人に玉木愛石、西脇呉石がおり、四天王寺に顕彰碑が残るという。(芹生)



<参考文献>

『東京芸術大学百年史 美術学校篇』第1巻

『天岡均一没後九十年回顧展：兵庫県三田市生まれの豪気な天才彫刻家』展覧会図録、七曜会編、2013

『第五回内国勲業博覧会記念写真帖 2』鳴戸源之助編、玉鳴館、1902

上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社、2001.12

三善貞司編『大阪人物辞典』、清文堂出版、2000.11

飯島春敬編『書道辞典』東京堂出版、1995.3

③大浦食堂食器 1式

アルミ盆2、平皿2、深皿2、コーヒーカップとソーサー各3、ティーカップ2、ティースプーン2

大浦食堂は昭和12年(1927)に美校構内の学生食堂(当初の名称は近くにあった梅林にちなみ「梅林食堂」であった)として営業を開始し、戦時中の一時中断を経て、大学発足と同年の昭和24年(1949)に「大浦食堂」として再開。以後長年にわたり芸大生の生活を支えてきた。平成11年に大



学美術館本館が竣工するとその1階に移り営業を続けてきたが、令和3年3月をもって惜しまれながら閉店となった。

本資料はその閉店時に食堂で使われていた食器を譲り受けたもので、大浦食堂の利用者にはここにかつて盛られた定番のメニューを彷彿させるものである。

当センターには他にも、かつて学内で使用された食器や印章などのいわゆるモノ資料が少数ながら保管されており、平成・令和時代の新しい大学の生活資料がここに加わったことになる。（芹生）

<参考文献>

藝大リレーコラム 第二十三回 北澤悦雄「大浦食堂の歴史-コロナで今思う事」

<https://www.geidai.ac.jp/container/column/relaycolumn_023>

3、資料活用実績

①問い合わせ件数 計 25 件

内訳（重複あり）

- ・資料有無問い合わせ 15 件
- ・閲覧希望 2
- ・資料・画像掲載許可申請 7
- ・遺族問い合わせ 3
- ・その他 1

②所蔵資料活用成果物（発表または寄贈されたもの）

（敬称略/発表順）

2020 年 3 月	田中公明「哲学堂と田中義雄・田中百嶺兄弟」『国際井上円了研究』第 8 号
2020 年 10 月	後藤亮子「大村西崖の美術史とその中国絵画観の変遷」『美術史』第 189 号
2020 年 12 月	浅井ふたば「文部省工芸技術講習所と東京美術学校」『東京藝術大学美術学部紀要』第 55 号
2020 年 11 月	高曾由子「漆芸の近代化—六角紫水と絵画をめざす工芸—」『鹿島美術研究』年報 37 号
2021 年 1 月	文教区立森鷗外記念館 企画・編集・発行『文京区立森鷗外記念館所蔵 森鷗外宛書簡集 3 <う-お> 編』
2021 年 1 月	大西純子「上野直昭資料について—日本美術史との関係を中心として—」（東京国立文化財研究所における研究発表、2021.1.28）
2021 年 1 月	田代裕一郎「上野直昭資料から発見された高裕燮直筆原稿について」（東京国立文化財研究所における研究発表、2021.1.28）
2021 年 3 月	斎藤泰嘉監修『佐藤慶太郎と東京都美術館のあゆみ』20 分版（日本語）NHK エデュケーショナル
2021 年 3 月	浅井ふたば「東京美術学校初期の図案教育」『LOTUS』第 41 号

③展示

学内展示

③-1「藝大コレクション展 2020——藝大年代記（クロニクル）」

東京藝術大学大学美術館本館 2020年9月26日（土） - 10月25日（日）

< https://www.geidai.ac.jp/museum/exhibit/2020/collection20/collection20_ja.htm >

（詳細は 15 ページ参照）

③-2「GACMA 前室展示」2020年12月7日（月）

第1回運営委員会がリモート開催となったため、初めて運営委員に当センターに来室いただく機会となった第2回開催（2020年12月）に合わせ、正木記念館1階のGACMA前室で東京美術学校の黎明期に関する資料の展示を行った。前室では今後も来室者のために随時資料展示を行う予定である。

<主な展示資料>

創立当初の校舎（写真）

制服・制帽（写真）

第1回修学旅行（写真）

卒業証書

東京美術学校校章入り食器（カップ・ソーサー・湯呑み等）

④報道・掲載

④-1 美術展ナビ

「東京藝術大学のオールスター 一挙登場『藝大コレクション展』」2020年10月1日
近現代美術史・大学史研究センターの史料の展示の様子も写真付きで紹介された。

<<https://artexhibition.jp/topics/news/20201001-AEJ302125/>>

④-2 『杜』

古田亮「近現代美術史・大学史研究センター（GACMA）の開設」『杜』第49号「お知らせ」に掲載

4、年間活動

4-1 年間の活動

2020 年 4 月

センター開室準備・環境整備

所蔵資料目録（編纂室から引継ぎ）整備、「概要」作成

センターweb ページ開設準備（「美校～美術学校の歩み」資料調査）

『東京藝術大学百年史』データベース化作業（「東京美術学校編」第1-3巻目次データ入力等）開始

2020 年 5 月

助成金申請

所蔵資料目録整備

センターweb ページ開設作業（資料調査）

歴史資料等保有施設の申請準備（他大学・組織事例調査）

『東京藝術大学百年史』データベース化作業（データ整備）

GACMA ロゴマーク完成

2020 年 6 月

第1回運営委員会（6/25）

センター開室準備（利用規約づくり）

センターweb ページ開設作業（資料調査）

歴史資料等保有施設の申請準備（所蔵法人文書・寄贈資料の目録整備）

『東京藝術大学百年史』データベース化作業

2020 年 7 月

センター開室準備（関係者名簿整備、封筒デザイン等）

センターweb ページ開設作業（コンテンツ作成）

歴史資料等保有施設の申請準備（所蔵法人文書・寄贈資料の目録整備）

『東京藝術大学百年史』データベース化作業

2020 年 8 月

歴史資料等保有施設の申請準備（所蔵法人文書・寄贈資料の目録整備）

大学美術館展示資料準備

センターweb ページ公開

センター開室案内送付（電子メール・郵便）

2020 年 9 月

外部からのレファレンス対応開始

歴史資料等保有施設の申請に向けた準備

大学美術館「コレクション展」にてブース展示（9/25~10/6）

未整理資料・図書の目録整備開始（学生アルバイト雇用）

2020 年 10 月

国文学研究資料館アーカイブズ・カレッジ短期コース受講（古田・浅井）

歴史資料等保有施設の申請書提出

未整理資料・図書の目録整備（学生アルバイト雇用）

『百年史』デジタル化計画・見積もり調整

2020 年 11 月

室内に閲覧コーナー整備・書架整理など

蔵書票デザイン・納品

未整理資料・図書の目録整備（学生アルバイト雇用）

『百年史』デジタル化計画・発注

2020 年 12 月

GACMA 看板設置（絵画科油画専攻版画 三井田盛一郎研究室による）

第2回運営委員会（12/7）

『東京芸術大学百年史 東京美術学校編』第1~3巻 デジタルデータ完成（全ページ PDF, TIFF, 各巻末索引のテキストデータ）

未整理資料・図書の目録整備（学生アルバイト雇用）

建築科・ヨコミゾマコト研究室・大学院美術教育科・木津文哉研究室に所蔵の大学史資料を見学
美術学部杜の会会報『杜』第49号に GACMA 開設の紹介記事掲載

2021 年 1 月

『年報・紀要』編集作業

『百年史』デジタルデータ スタンドアロン端末で使用開始

未整理資料・図書の目録整備（学生アルバイト雇用）

2021 年 2 月

『年報・紀要』編集作業

国立公文書館「公文書管理研修Ⅰ（独法等向け）」受講（浅井）

歴史資料等保有施設（内閣府公文書管理課よりセンター閲覧室・収蔵庫視察来訪）

web ページ英訳作業

2021 年 3 月

『年報・紀要』編集作業

web ページ英訳作業継続

『百年史』デジタルデータ web ページへ公開（『東京美術学校編』第1巻）

4-2 特記すべき事項

①コロナ禍のさなか美術学部 近現代美術史・大学史研究センター（GACMA）が発足

美術学部 近現代美術史・大学史研究センター（GACMA）は令和2年1月に設置、新年度の開始とともに現メンバーで稼働を始めたが、同時期に新型コロナウイルス感染症の拡大が深刻な状況となり、4月7日に最初の緊急事態宣言が発出、翌日には芸大もキャンパスへの立ち入り・施設利用禁止の措置が取られた。この事態を受けてGACMAでも船出早々から全員のリモートワークを余儀なくされたが、緊急事態宣言の解除後は感染拡大の状況を見つつ、徐々に研究室内の環境整備や資料整理を進めていった。

この影響で同年9月1日のGACMAのオープンに合わせて予定していた閲覧業務の開始は来年度に持ち越し、まずはwebページを開設して外部からのレファレンスの受付を開始した。後期に入ってからリモートワークを取り入れて出勤日を制限しながら、資料整理と並行してデジタルデータ化と公開、展示、その他の調査活動を進めている。



2020年5月29日、正木記念館（左）と図書館とブルーインパルス（撮影：浅井ふたば）

②所蔵資料の整理・登録

年度の当初より未整理資料の目録化を進行中であり、今年度は2,000点の目録を作成した。この作業は新型コロナウイルス感染拡大による学内の施設利用禁止期間中には行うことができなかったが、出勤可能となった5月以降に再開し、9月以降はアルバイトを雇用して順次対象を広げて行った。所蔵資料の数量と内訳が改めて把握され、作成した目録により歴史資料等保有施設指定に向けて申請を行った。来年度以降にはこの目録をもとに資料の検索環境を整備するなど、閲覧者の利用に供していきたい。

③運営委員会の開催

◇令和2年度 第1回運営委員会（6月25日（木）リモート）

新型コロナウイルス感染拡大により、リモートで開催された。GACMA 設置の意義と活動報告、今後の予定などが報告された。委員からは、貴重な学史史料の公開、とくにアジアを中心とする国際的な位置付けの重要性と、そのための方策（多言語による情報公開など）が提言された。

◇令和2年度 第2回運営委員会（12月7日（月）於：美術学部近現代美術史・大学史研究センター 室）

初めて運営委員を GACMA 閲覧室・研究室に招いての対面開催で、モニタを設置してリモート参加者も交えての委員会となった。歴史資料等 GACMA の活動報告と今後の予定などの報告が行われた。学内にいまだ眠っているであろう学史史料の散逸を防ぐ方が話題となり、各研究室へ呼びかけて積極的に調査・収集を行うよう提言があった。後日古田センター長よりメールや教授会などで学部全体へ呼びかけを行い、複数の教員・研究室から保管資料の情報をご提供いただいた。

この日に合わせて GACMA 前室に掲示ボードとアクリルケースを設置し、資料の一部を展示した。また委員会終了後に収蔵庫の見学をしていただき、GACMA 所蔵資料の重要性と保管状況について情報を共有した。

④web ページの開設（8月31日）

9月の GACMA オープンに合わせて公式 web ページを公開した。

GACMA web ページ<<https://gacma.geidai.ac.jp/>>

「活動理念」「利用案内」で当センターの位置付けを示し、「あゆみ」では東京美術学校の沿革を、所蔵の写真資料を用いて豊富なビジュアル情報とともに紹介した。また「問い合わせ」の窓口を設置し、一般からのレファレンスの受け付けを開始した。

研究活動の紹介として、9月に行った大学美術館における展示のトピックを追加公開した。このスペースは今後も日常の活動報告として使用していく予定である。

所蔵資料の公開のひとつとして、既刊の大学史である『東京芸術大学百年史 東京美術学校編』のデジタルデータを web ページ上に公開した（令和3年3月31日時点で第1巻公開。来年度以降順次第3巻まで公開予定）。

当センターからの発信を多言語で行う必要性については、運営委員よりご指摘をいただいている。その最初の試みとして公開済みの日本語ページを翻訳し、英語ページを作成した（2021年4月アップロード予定）、将来的には①インターネット上に掲載するデータやアーカイブ本体も日英バイリンガルにしてゆくこと、②さらに中国語・韓国語も含めた多言語 web ページとしてゆくことを目標とする。

web デザインと管理は嘉村哲郎氏（東京芸術大学芸術情報センター助教）の全面的な協力を得、今後も共同作業を行なっていく。web ページの英訳は、大学院修士2年の

田中 John 直人氏（大学院美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻）に協力していただいた。

⑤歴史資料等保有施設の申請

GACMA は本学美術学部の学史編纂事業により蓄積された多くの資料や研究成果を引き継いでいる。これらを「歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料」と位置づけ、適切な管理と継続的な学術利用に供するため、年度当初より「公文書管理法施行令第5条第1項第4号の定める「歴史資料等保有施設」の指定申請の準備を進めてきた。無事に申請に至り、内閣府の指定を待つばかりの段階である（2021年3月現在）。

今後は大学内の歴史資料等保有施設として、教育アーカイブズの保存・管理・公開を促進してゆく。

参考：「公文書管理法の適用対象外となる施設（歴史資料等保有施設）」

（内閣府ホーム＞内閣府の政策＞制度＞公文書管理制度＞制度について＞対象となる機関等）

<<https://www8.cao.go.jp/chosei/koubun/about/kan/kikan.html>>

<申請の経過>

年度前半 申請に向けた資料整理・目録作成

2020年10月9日 申請書提出

2021年2月12日 内閣府公文書管理課の現地視察

2021年4月 指定（予定）

⑥大学美術館コレクション展「藝大コレクション展 2020——藝大年代記（クロニクル）」（2020.9.27~10.6）にてブース展示

今年度はコロナ禍のさなかで開催となった大学美術館のコレクション展は「藝大年代記（クロニクル）」と銘打ち、大学美術館を代表するコレクションのなかから学史を辿る企画であった。この企画に歩調を合わせるかたちで、GACMAの所蔵資料をブース2箇所以下に以下の1~3のテーマで展示した。

- 1.開学当初の資料（明治44年火災で焼け残った資料を含む開学当初の資料を展示）
- 2.岡倉天心追悼会関連資料（大学の初期コレクションを主導した天心の関連資料を展示）
- 3.藝祭関連資料（コロナ禍におけるバーチャル藝祭開催を受けて、藝祭関連資料を展示）

冊子形式の資料が多く、展示ケース内では見せられる場面が限られるので、ブース脇に設置したモニタで内容の画像をスライドショーでエンドレス再生し、ページをめくって冊子を見るような効果を狙った。



(左：焼け残り文書および岡倉天心関連資料、右：藝祭関連資料)

<主な展示資料>

- 「明治二十三年九月（ママ） 第一回入学生在学証書教場掛」簿冊
- 「従明治二十二年至同二十九年 東京美術学校年報 一 東京美術学校」簿冊
- 「大正二年十一月 故岡倉覚三君追悼会関係資料綴」簿冊
- 東京芸術大学芸術祭 ポスター（昭和 24 年） その他 計 13 点

⑦GACMA ロゴ決定、看板の設置、蔵書票作成

GACMA の組織名のロゴタイプ制作をクリ・ラボ<<http://kurilab.com>>の栗原幸治氏に依頼し、このロゴを用いて web ページや刊行物（本年報・紀要）、封筒等を作成した。

また看板のデザインと製作を三井田盛一郎研究室（絵画科油画専攻版画）にお願いし、GACMA の所在する正木記念館の入り口に掲げた。

クリ・ラボの栗原幸治氏には蔵書票のデザインもお願いした。

このように統一的なデザインで組織の外観や作業周りの文房具を整備している。



(左上：GACMA 封筒、左下：蔵書票、右：GACMA 看板)

⑧『百年史』デジタルデータの公開

『東京芸術大学百年史』には GACMA の所蔵資料が数多く収載され、研究者のみならず一般のレファレンスにおいても参照頻度が非常に高い基礎資料である。なかでも注目度の高い『百年史』美術学校編第 1～3 巻をデジタルデータ化し公開することを目指し、全ページをデジタル複写（PDF ファイル/TIFF ファイル）し、さらに各巻末に掲載する人名索引を OCR 処理によりテキスト化を行った。一連の作業は株式会社誠勝（スキャン代行サービス「そのままスキャン」<<https://sei-syou.com/>>）に外注した。

生成されたデータをもとに、GACMA の web ページ内より全ページ PDF のインターネット公開を行う。<<https://gacma.geidai.ac.jp/y100/>>

（2021 年 3 月 31 日現在、まずは第 1 巻を公開した）。新年度以降第 2 巻・第 3 巻の全ページ PDF の公開を進めていくとともに、人名索引を利用した検索システムの実現を模索する。

企画段階からデータの実装まで、東京芸術大学芸術情報センター助教 嘉村哲郎氏の全面的な協力を得、来年度以降も共同作業を行なっていく予定である。

⑨年報・紀要の編集・発行

GACMA の活動報告、所蔵資料の概要と使用状況、資料紹介、活動報告などを掲載し、年に一度刊行。次年度以降さらに内容を拡充する。

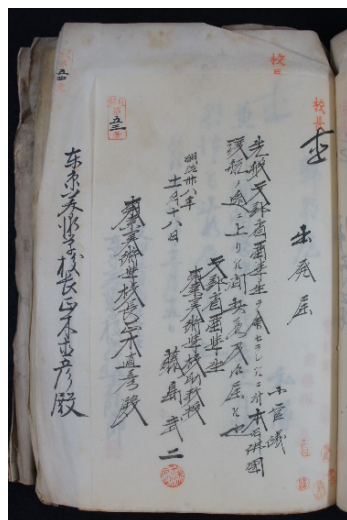
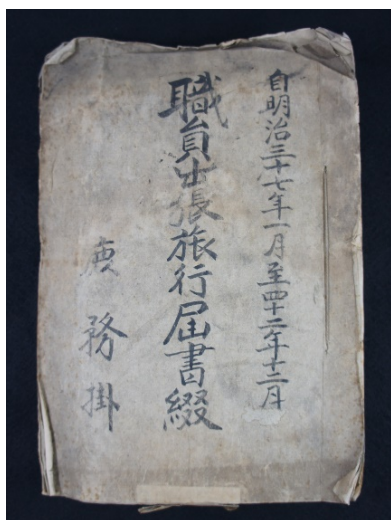
5、資料紹介・研究報告

東京美術学校と海外留学 ―GACMA 所蔵 海外留学関連資料より―

浅井ふたば

東京藝術大学（以下、「藝大」と略記）は、平成 26 年（2014 年）、文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」において「グローバル牽引型」大学に採択され、グローバル化をさらに推進し、海外留学支援策を拡充している。本稿では、藝大の前身である東京美術学校（以下、「美校」と略記）が 100 年以上前からすでに海外に目を向け、グローバルな活動を行っていたことを確認するため、当センターが所蔵する海外留学関連資料について触れたい[注 1]。以降で紹介していく資料は、美校の部局における日常業務で扱われた事務文書であり、美校が展開してきた活動の証拠となる資料である。

『職員出張旅行届書綴』【図 1】は、明治 37 年（1904 年）1 月から明治 42 年（1909 年）12 月までの期間、美校の教職員が出張時に庶務掛へ提出した出発届や到着届などの書類を綴じた簿冊である。記録されている出張 220 件のうち海外出張は 14 件であり、海外出張の主な目的は欧米への海外留学であった。とくに明治 37 年（1904 年）前後は、アメリカで開催されたセントルイス万国博覧会視察を含む海外留学が増加した[注 2]。世界各国の美術品が展示される万国博覧会は、国益に結びつく輸出向け美術工芸品を研究する場でもあったことから、明治政府から派遣された岩村透、大村西崖らは世界水準の美術を見て学び、帰国後にその内容を伝えた。



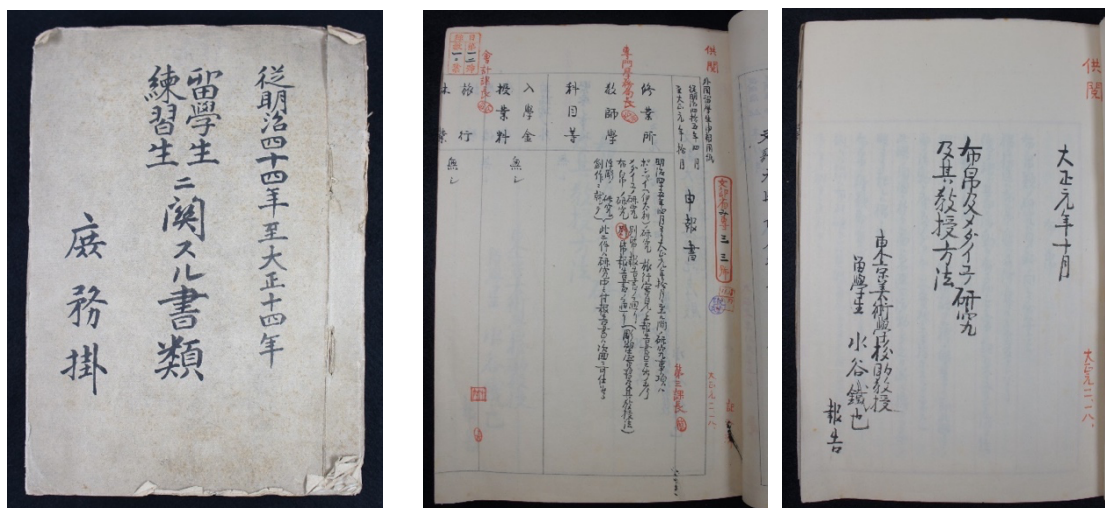
【図 1】（左）、【図 2】（右）明治 38 年 11 月 18 日、西洋画科助教授藤島武二がフランスとイタリアに留学した際の出発届

【図 3】

簿冊に綴じられた届出書の大半は、出張先、出張事由、出張者氏名、出発日や到着日などを墨筆で記した書式だが【図2】、絵はがきが届出書とみなされている事例もあった。美校第5代校長の正木直彦は、前述のセントルイス万国博覧会の視察のため明治37年（1904年）8月12日に出発、中継地のバンクーバーに到着した8月23日に当地から美校に絵はがきを送った。絵はがきは、庶務掛主任（文部省書記官）の屋代鉄三、庶務掛の宮島孝、土屋軍治の承認印が押されることで、到着届として扱われた【図3】。

『留学生練習生ニ関スル書類』【図4】は、明治44年（1911年）から大正14年（1925年）までの期間、庶務掛が作成した官費留学に関する書類を綴じた簿冊である。この簿冊には、「文部省海外留学生」（大正9年に「文部省在外研究員」と改称）と「農商務省海外実業練習生」の規定や各省から出された通知、留学内容を記した申請書や留学の成果を記した報告書などが綴じられている。明治政府の留学制度を通じた最初の海外留学生は明治30年（1897年）にフランスに渡った西洋画科助教授の岡田三郎助で、その後大正期までに27名が派遣された[注3]。海外留学生は官立高等教育機関の教員として欧米（仏、独、英、米、伊）で美術を学んで帰国し、近代日本における美術教育の基盤をつくった。

申請書は海外留学の内容を文部大臣宛てに申請または報告した書類であり、留学の目的、留学先の学校名、受講予定の授業名、授業料、滞在先などが詳細に記されている【図5】。また、留学研究成果の報告書は、10頁以上にわたる自筆の本格的なレポート【図6】を作成した者もいれば、留学中につけた日記を報告書として提出した者もいた。日記からは留学者の欧米での新鮮な体験がうかがえる。

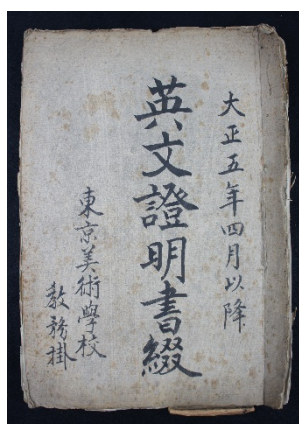


【図4】 明治43年12月フランス、ドイツ、イタリアに留学した彫刻科助教授の水谷鉄也の申請書【図5】（左）と報告書【図6】（右）

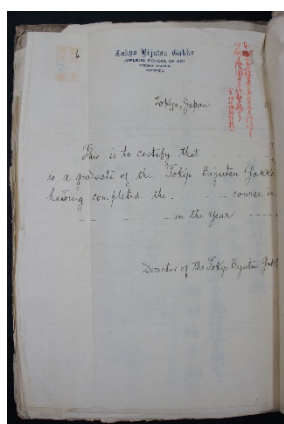
『英文証明書綴』【図7】は、大正5年（1916年）4月から昭和12年（1937年）6月までの期間に教務掛で発行した英文卒業証明書の申請書（下付願）と写し30件を綴じた

簿冊である。英文卒業証明書は主に美校卒業生の留学希望先に提出された。大正5年（1916年）の10月までは、教務掛に英文卒業証明書の書式がなく、都度手書きで作成していた。そこで、参考資料として東京帝国大学庶務課から「英文卒業証明書様式用紙」を取り寄せ、嘱託講師（英語、西洋美術史、西洋彫刻史担当）の矢代幸雄によって英文卒業証明書の書式が作成された【図7】。

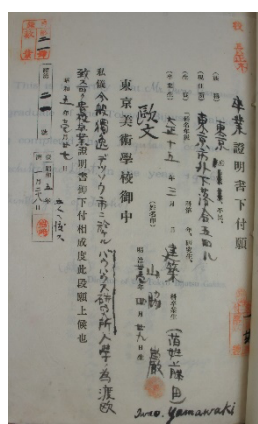
証明書を専攻別の発行枚数にみると、西洋画科が10人、建築科が6人、図案科が4人、日本画と彫刻科が各3人、工芸科と図画師範科が各2人であった。留学希望先はドイツのバウハウス【図9】、アメリカではウエストミンスター大学、エール大学、コロンビア大学、シカゴ美術大学、東南アジアでは中国、暹羅国(シヤム)、ビルマなどであった。なお少数ではあるが、証明書が海外の就職先へ提出されたケースもあった。三木榮（明治43年漆工科卒）は大正13年（1924年）に暹羅国宮内省へ、後藤賞一郎（昭和7年建築科卒）は昭和7年（1932年）上海工部局建築科へ、佐瀬芳之助（昭和2年彫刻科撰科卒）は昭和10年（1935年）に暹羅国立美術工芸学校に証明書を提出しており、その当時からすでに国際社会で活躍するグローバル人材が育成されていたといえる。



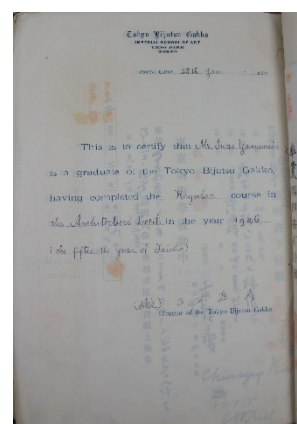
【図7】



【図8】



【図9】日本人二人目のバウハウス留学生である山脇巖（大正15年建築科卒）の下付願と英文卒業証明書



注

- 1 東京美術学校が受け入れた外国人留学生に関する研究は、当センターの前身である教育史料編纂室の吉田千鶴子氏によってまとめられ、『近代東アジア美術留学生の研究—東京美術学校留学生史料』（ゆまに書房、2009年）として出版されている。
- 2 『東京芸術大学百年史』美術学校編 第二巻、芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史慣行委員会、平成4年、275～283頁。
- 3 『東京芸術大学百年史』美術学校編 第三巻、芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史慣行委員会、平成9年、25頁。「⑥文部省在外研究員」に記載されている明治期と大正期に派遣された文部省在外研究員26名に、農商務省海外実業練習生として明治37年にアメリカに留学した河辺正夫を加えた。

小場恒吉講義資料（青写真）について

芹生春菜

小場恒吉（1878-1958）は東京美術学校出身の工芸家・画家・紋様研究家で、同校教員を長く務めた。GACMA には小場が美術学校における授業で用いたと思われる講義資料（青写真）が保管されているのでここで紹介したい。

小場は秋田市に生まれ、明治 30 年東京美術学校日本画科（予科）に入学。翌年に本科の図案科に転科し、在学中に東大寺法華堂や平等院鳳凰堂の装飾研究に携わった。卒業制作「美術学校建築設計図」は、本学大学美術館蔵の所蔵品となっている。卒業後は茨城県立龍ヶ崎中学校や故郷秋田の秋田県立秋田工業学校の教員となり、同 41 年に東京美術学校雇（図案科助手）、大正元年同校助教。奈良や朝鮮へたびたび出張して調査や模写に従事するかたわら、美術学校では「工芸模様史」「日本文様史」の授業を担当した。

大正 5 年には一度美校を辞して、朝鮮総督府嘱託により朝鮮各地の古跡調査および壁画や出土遺物の模写に従事した。大正 14 年美校講師に復帰、昭和 21 年に工芸科主任教授となる。戦後の東京芸術大学発足後も引き続き同大教授となり、同 27 年に 75 歳で退官。その間に長年にわたる紋様研究の成果をまとめた『日本紋様の研究』で、昭和 25 年に芸術院恩賜賞を受賞した〔注 1〕。

本資料は青写真全 39 枚で、おおよそ 27.5cm×39.5cm の柔らかくざらつきのある紙に感光剤を塗布した印画紙に、原画（ポジ）を重ねて露光し、現像液で現像して白黒反転の画像を得たものである【図 1】。原画はトレーシングペーパーのような光を透過する支持体に描いたと思われるが本資料には含まれず、複写である青写真のみが伝わっている。

内容は主に日本の美術工芸品とその意匠の一部を取り出して模写したもので、小場が教鞭をとった「日本文様史」の授業で用いた教材と推測される。各紙には手書き文字による「第〇〇枚」の通し番号と落款印が焼き付けられている。通し番号が一部重複することから少なくとも 2 種以上のシリーズが混在すると推測されるが、落款印には丸印朱文（反転して白線が浮かび上がる）【図 2】と角印白文（同じく青線が浮かび上がる）【図 3】の 2 種があり、①丸印を捺す 10 枚と、②角印を捺す 29 枚の 2 組に分けると、内容も「①日本の考古遺物」と「②日本の仏教美術工芸品」に二分される【表 1】。

「①日本の考古遺物」のシリーズは縄文時代から古墳時代までの布や器物、武具や馬具、装飾古墳の意匠をとりあげている。一方「②日本の仏教美術工芸品」は法隆寺の遺物を中心とし、シリーズの第 1 枚を地中海地方のアカントス・パルメット文様の集成、続いて法隆寺金堂天蓋の実測図と各部文様、仏像の宝冠や光背、装身具類の唐草文、玉虫厨子の実測図と各部唐草文、天寿国繡帳や古代裂、そして瓦と、いわゆる飛鳥・白鳳時代の仏教意匠に主眼を置いたラインナップとなっている。

天蓋や厨子は全体実測図中に各部の番号をアルファベットや数字で示し、対応する各部の詳細を周囲に描く。また青焼き後完成に朱字で番号や「実大」「原物ヨリ少々小ナリ」などのメモを書き込んだ箇所もある。

印画紙は既製品か、あるいは小場が自ら紙に感光剤を塗布して調製したのかは不明である。原画の紙継ぎや原画を印画紙に留めた粘着テープの痕跡が写り込み、裏面には液体（現像液であろうか）に浸したと思われる青色のムラや滲みが観察される。

描かれた文様は表現が明瞭で、複雑な曲線も流麗に再現されて原作品の雰囲気損なうことがない。日本やアジア諸国の古蹟調査に参加し、実測に基づく精緻な模写に定評があった小場の技量がいかに発揮されている。青と白のコントラストにより図面の細線や小さな文字も比較的視認性が高くシャープに見えるが、一方で青焼きの濃淡のグラデーションも階調豊かに表現できる特性を生かし、絵画的な意匠の模写では量しや滲みを巧みに用いている【図4】。また、特定の美術工芸品でなく抽象的な波線を数種描いている部分もあり【図5】、授業のなかで美術史・紋様史の講義だけでなく、描画法の指導も行っていたのではないかと想像する。

ところで小場の郷里である秋田の市立赤れんが郷土館には、「工芸模様史」「日本文様史」の講義ノート、および文様模写図や拓本などの重要資料が保管されており、本資料と関連性の高いことがつとに紹介されている〔注2〕。

この資料群には、小場が学んだ今泉雄作の「図案法」の講義のメモや、パルメット唐草の伝播について参照したと見られるオーウェン・ジョーンズ『The Grammar of Ornament』の挿図の模写などが含まれており、小場の文様史の講義のアイディアの源泉がうかがい知れる。このジョーンズの著作はフェノロサと岡倉天心が欧米視察（明治19～20年）の際に購入し美術学校の文庫へ納入した図書の一つで〔注3〕、その影響が本資料【表1】の②-01【図1】に反映していると指摘されている。法隆寺の遺物に先駆けて、仏教美術のシリーズの最初の1枚に地中海の唐草文を配する構成は、小場の文様史観を表したものと考えられる。さらに、法隆寺金堂天蓋の鳳凰と唐草文を描いた②-03【図6】と完全に同一の図（ただし白黒反転前のもの）が存在し〔注4〕、本資料との強い関連をうかがわせる。さらに別の図中にはトレーシングペーパーの使用も報告されており〔注5〕、小場が日常的にトレーシングペーパーを用い、青写真の原画にも使用したのではないかと想像できる。このほか小場自身の講義の構想を記したノートには明治42年～昭和23年の書き込みが認められ、長期にわたって改訂を重ねながら使用したらしいと報告されている。これは小場が美校雇になった直後から、戦後の東京芸術大学発足の直前までの長期に渡るもので、本青写真の制作年代も同様にある程度幅をもって考えるべきであろうか〔注6〕。

美術学校における実習や講義においては、授業のなかで生徒に絵図を示すことが不可欠であり、そのための模本類や美術写真、幻燈用の乾板写真等が美校創設当初から大量に購入・作成され教材として蓄積されてきた。青写真はこれに準ずる簡易な複写技術で、スライド写真やオフィス用複写機が流通する前には教材作りに広く使われていたと思われる。

本資料の青写真は、文様史および実測・模写のスペシャリストである小場の原画に基づいたものであること、小場の文様史構想に関わる学外資料とも密に関連したものであること、講義で用いられた具体的な教材であることなど、極めて貴重な価値を持つものと改めて認められる。

注

- 1 小場の年譜や模写事業については以下の論考を参照した。①横溝廣子「小場恒吉の楽浪漆器文様調査」樋田豊郎編『楽浪漆器 東アジアの文化をつなぐ漢の漆工品』（美学出版、2012.2）。②横溝廣子「忍冬文の伝播」同書所収。③大西純子「関野貞と東京美術学校」藤井恵介・早乙女雅博・角田真弓・西秋良宏編『東京大学コレクションⅡ 関野貞アジア踏査』（東京大学総合博物館、2005.6）。④佐々木榮孝『紋様学のパイオニア小場恒吉』（明石ゆり、2005.7）。
- 2 注1②および④前掲論文。
- 3 注1②前掲論文、pp.243-260。『東京美術学校百年史 美術学校篇』第1巻、pp91-94（ぎょうせい、1988）
- 4 注1②前掲文献の図4「推古文様」に、本資料【図6】と原画を同じくする同図様がある。ただし図中に見える書き込み文字の位置は異なるようである。
- 5 注1②前掲文献のp254 および図13。
- 6 模写原画の制作時期は主に助手時代（明治41-44年頃）と見られ、法隆寺百済観音像光背および玉虫厨子の制作年次は明治44年という。注1④前掲論文、pp.34-41。



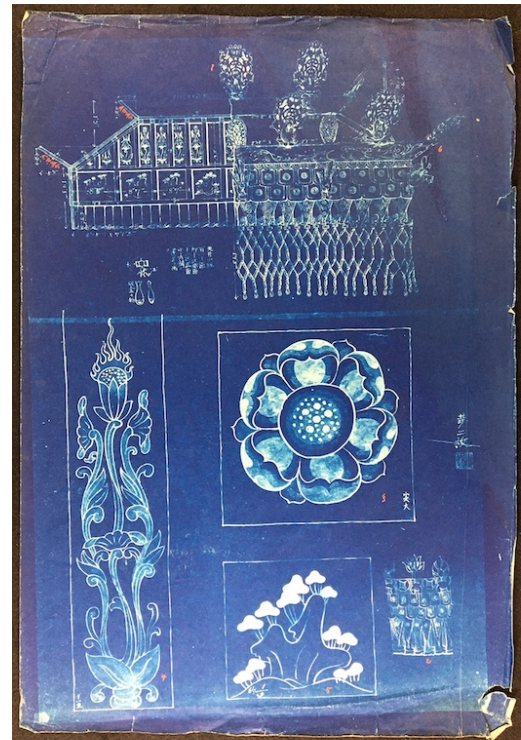
【図1】②-02 アカントス文・パルメット文



【図2】①グループの落款印(丸印)



【図3】②グループの落款印(角印)



【図4】

②-02 法隆寺金堂天蓋 図面
(側面図), 天蓋内格天井の蓮
華, 支輪板の蓮枝, 山岳文文



【図5】

①-02 円文 / 縄文~弥生時代の文様
(縄目文・鋸齒文・格子文) / 波線の
バリエーション

【図6】

②-03 唐草文各種 / 法隆寺金堂天蓋
鳳凰



【表 1】

組	番号	手書番号	落款印	内容	備考
①日本の考古遺物					
①	01	第一枚	丸印朱文	布の意匠(青海波・鱗繋ぎ) / 織物組織図 / 縄目文 / 器物の文様 など	
①	02	第二枚	丸印朱文	円文(重圈文鏡か) / 縄文~弥生時代の文様 (縄目文・鋸歯文・格子文) / 波線のバリ エーション	
①	03	第三枚	丸印朱文	眉庇付冑 全体と各部	
①	04	第四枚	丸印朱文	装飾古墳 直弧文 雲気文(蕨手文) / 鋸歯 文・櫛歯文のある圈帯(楽浪鏡または釧 か)	
①	05	第五枚	丸印朱文	装飾古墳 直弧文・靱(重定古墳か) 盾・ 同心円文・蕨手文・連続三角文(日ノ岡 古墳か)	
①	06	第六枚	丸印朱文	直弧文鏡(新山古墳出土か) / 透彫垂飾(心 葉形・舌形)	
①	07	第七枚	丸印朱文	心葉形杏葉(5 は静岡県島田市 御小屋原 古墳出土[東博蔵]か), 唐草文鏡板ほか透彫 金具各種	
①	08	第八枚	丸印朱文	パルメット文・蓮華文各種(棘葉形杏葉, 軒丸瓦, 蓮華宝珠)	
①	09	第九枚	丸印朱文	環頭大刀	
①	10	第十枚	丸印朱文	銅鐸 鋸歯文・格子文・渦卷文・流水 文・人物・獣・亀など	
②日本の仏教美術工芸品					
②	01	第一枚	角印白文	アカントス文・パルメット文	朱字(1-39)
②	02	第二枚	角印白文	法隆寺金堂天蓋 図面(側面図), 天蓋内格 天井の蓮華, 支輪板の蓮枝, 山岳文	朱字(1-5, 五寸五分, 六寸五分)
②	03	第三枚	角印白文	唐草文各種 / 法隆寺金堂天蓋鳳凰	
②	04	第四枚	角印白文	法隆寺金堂天蓋透彫金具, 夢殿救世観音 宝冠冠繪	
②	05	第五枚	角印白文	法隆寺献納宝物 半跏思惟像台座山岳文 様/ 金銅透彫金具	朱字(実大, 原物ヨリ 少々小ナリ)
②	06	第六枚	角印白文	法隆寺金堂釈迦三尊像/ 天蓋飛天光背, 光背蓮華唐草文帯	朱字(総高一尺四寸), 紙継ぎ

②	07	第七枚	角印白文	法隆寺金堂釈迦三尊脇侍菩薩宝冠/ 雲気文唐草/ 流水文	
②	08	第八枚	角印白文	法隆寺百済観音頭光, 腕釧 /金銅透彫臂釧か	
②	09	第九枚	角印白文	玉虫厨子図面, 金具詳細	
②	10	第十枚	角印白文	玉虫厨子扉絵 日月・鳳凰・騎鳥仙人・樹木・鬼・岩石・建物・龍	朱字(1-11)
②	11	第十一枚	角印白文	玉虫厨子 台座框脚部神獣図と蓮弁	図中アルファベットは②-09 図面中の番号に対応
②	12	第十二枚	角印白文	玉虫厨子 台座框上唐草文	図中アルファベットは②-09 図面中の番号に対応
②	13	第十三枚	角印白文	玉虫厨子 台座框上唐草文	図中アルファベットは②-09 図面中の番号に対応
②	14	第十四枚	角印白文	玉虫厨子 台座框上唐草文	図中アルファベットは②-09 図面中の番号に対応
②	15	第十五枚	角印白文	玉虫厨子 各部唐草文様	図中アルファベットは②-09 図面中の番号に対応
②	16	第十六枚	角印白文	玉虫厨子 各部金銅透彫金具唐草文様	図中アルファベットは②-09 図面中の番号に対応
②	17	第十七枚	角印白文	台座框・格狭間各種(百済観音, 玉虫厨子, 法隆寺献納宝物山田殿像など)	
②	18	第十八枚	角印白文	格狭間	
②	19	第十九枚	角印白文	夢殿救世観音頭光, 同金銅透彫宝冠	紙継ぎ
②	20	第二十枚	角印白文	法隆寺献納宝物 金銅透彫灌頂幡 /獅子鎮柄香炉(鎮子部分) /獅子図	紙継ぎ
②	21	第二十一枚	角印白文	光背各種 法隆寺献納宝物か	
②	22	第二十二枚	角印白文	光背各種 法隆寺献納宝物金銅透彫光背か	紙継ぎ
②	23	第二十三枚	角印白文	法隆寺献納宝物 金銅透彫光背 2 種(庚寅年銘光背ほか)	紙継ぎ

②	24	第二十四枚	角印白文	金銅透彫金具各種, 法隆寺百済観音宝冠 冠繪など
②	25	第廿五枚	角印白文	天寿国繍帳
②	26	第廿六枚	角印白文	天寿国繍帳 亀・月象・鳳凰・雲気文な ど / パルメット宝珠
②	27	第二十七枚	角印白文	法隆寺裂(経絰 太子間道)
②	28	第二十八枚	角印白文	古代瓦各種(軒平瓦・軒丸瓦)
②	29	第二十九枚	角印白文	古代瓦各種(軒丸瓦)

6、名簿

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター 運営委員会

日比野克彦（美術学部長）（以下五十音順）

荒井 経（大学院美術研究科 文化財保存学日本画専攻 教授）

黒川廣子（大学美術館 教授）

斎藤典彦（日本画科 教授）

佐藤道信（芸術学科 教授）

光井 渉（建築科 教授）

李 美那（大学院美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻 准教授）

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター（GACMA）

古田 亮（センター長/ 大学美術館 准教授[兼]）

浅井ふたば（非常勤講師）

芹生春菜（非常勤講師）

嘉村哲郎（芸術情報センター 助教）

本年度の当センターの活動にあたって、公益財団法人鹿島美術財団様より助成を賜りました。厚く御礼申し上げます。

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター年報・紀要
令和2年度（2020）

編集・発行 東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター
発行日 2021年3月31日

GACMA: GEIDAI Archives Center of Modern Art
110-8714 東京都台東区上野公園 12-8
<https://gacma.geidai.ac.jp/>